

2011年度明治大学文学部アジア史専攻・夏休み海外ゼミナール報告

氣賀澤保規（アジア史専攻・教員）

アジア史専攻（氣賀澤ゼミ）では次のように海外ゼミを実施し、それぞれ多くのことを体ごと感じとり、無事帰国しました。今後の大学生活や将来に活かしてくれることを期待します。海外ゼミのために支援いただいた文学部の関係各位に感謝申し上げます。

参加者：学生13名（1年4名、2年1名、3年6名、4年2名。すべてアジア史専攻生）
教員1名（氣賀澤・アジア史専攻）

日程：2011年9月8日（木）—12日（月）

目的：アジア史・中国史を学ぶものの立場から、その歴史・文化を生んだ現地（現場）に立ち、中国の大地に生きる人々の息吹にふれ、まるごと体感する。歴史を考える素養を養い、中国の本質や特質、日本の進むべき道などを考え、将来のアジアに向き合う体力をつける。大いに楽しみ、かつ勉強しよう。

見学先：中国北京市

見学・ゼミの柱：

アジアを体感しよう！！ 中国の首都・悠久の歴史の北京にフィールドワーク

- 1、故宮博物院（紫禁城）：中国の都城史の頂点（日本古代都城にも関係）、皇帝権力の粋（都城と権力の完成形）から中国史の本質を考える。
- 2、長城：なぜ中国は長城という構造物を造り続けたか。対外的意味と対内的意味は。
- 3、明十三陵の定陵：皇帝権と墳墓、中国人の墓にかける思いを理解する。
- 4、市内の行動：博物館（国家博物館）・繁華街（王府井・西単など）、老北京（前門・瑠璃廠・胡同・四合院など）の見学。歴史と現代の接点にふれる。
- 5、大学見学・学生交流：北京師範大学、北京大学。今後の交流の足場を築く。将来の留学、アジアの現地に飛躍することを肌で知る。
- 6、同じ専攻の学年を越えた友人関係の構築。楽しく真剣な旅をする。

海外ゼミ実施行程の報告

日次	月日（曜）	日程（行動記録）	宿泊・食事
1	2011年 9月8日(木) 曇り	早朝6時30分に羽田空港国際線ロビーに全員集合、搭乗手続き（CA184便）。 8時30分羽田空港発、北京空港着11時15分。 中国国際旅行社のガイド合流し、バスで市内に。 途中で 北京オリンピック会場の鳥巢 を外から見学。 14時30分：ホテル 同春園飯店 に到着。 16時—17時：北京師範大学構内の 文物博物館 見学。明治大に留学していた陳濤先生（専任講師）と同大学院生の案内。同大学の寧欣教授とも合流。寧欣教授は唐代科挙史や都市史の著名教授。 19時—21時：ホテル近くのレストランでテーブルを囲んで全員で食事をする。	同春園飯店 （北京師範大学の前のホテル） （昼食） ホテル横の食堂 （夕食） 大学周辺のレストラン

2	9月9日(金) 晴れ 気温 20度	<p>7時朝食（ホテルの食堂）、8時迎いのバスで出発。</p> <p>9時30分-10時40分：長城（八達嶺）。長城に登り、歴史を体感。それぞれ長城の大きさ、厳しさを目の当たりにし、中国史におけるその意義を考える。</p> <p>11時30分：北京第一関の居庸関雲台を見学。元代の諸族の言語の碑刻（文字）や仏教石刻に歴史の面白さを考える。</p> <p>12時30分-14時：昼食、あわせて北京の歴史特産品工場（七宝焼き工場）を見学。</p> <p>14時30分-15時40分：明十三陵の定陵（万曆帝陵）地下宮殿を見学。中国で唯一発掘の皇帝陵。</p> <p>17時ホテルに。</p> <p>17時30分-18時30分：北京師範大学の学生食堂、現地学生に混ざって夕食。陳濤先生や寧欣教授、他の院生も一緒に行動。品数は豊富、方式は明大師弟食堂と同じ。</p> <p>19時-21時：歴史学院の教室で学生交流会、先方の学生は学部生から院生まで約40名。机上には茶菓子や果物、記念品もあり。明大側も持参したボールペン（明大グッズ）を返礼に配る。副院長（国際交流担当）の張皓教授と明大側の氣賀澤教授が挨拶、つづいて明大側の学生全員が中国語で自己紹介、それをうけて中国側の学生も自己紹介。中国語・英語・日本語があり、賑やかで和やかな会となる。</p> <p>自己紹介後、それぞれ日本側学生を囲んでのグループに分かれた話し合い。筆談も交え、各グループが楽しく盛り上がる。予定した時間を越えて21時まで会はずつき、名残を惜しみつつそれぞれ連絡先を交わし分かれる。構内を散策して21時30分にホテルにもどり、就寝。</p>	<p>同上</p> <p>(昼食) 郊外のレストラン</p> <p>(夕食) 北京師範大学学生食堂</p>
3	9月10日(土)、 雨 朝の気温 19度	<p>7:00 朝食（ホテル） 市内見学</p> <p>8時出発、天安門広場を出る。</p> <p>9時30分-10時40分：今年から再開の中国国家博物館見学。青銅器をはじめ一級品がならび圧巻。</p> <p>11時-12時30分：故宮（紫禁城）、中心軸上の主要宮殿を見学。壮大な建築群に学生も圧倒される。</p> <p>13時15分-14時：市内レストランで昼食。</p> <p>14時15分-15時15分：天壇公園の祈年殿を見学、清代の冬至と年初の祀りと皇帝権の問題を考える。</p> <p>15時30分：茶芸館に、各種の中国茶の上演を見学。</p> <p>16時30分-17時30分：北京の古い街並みの胡同（フートン）巡り（北海公園付近）、人力車に乗り、四合院の造りの民家を訪れ内部を見学する。</p> <p>18時過ぎホテルにもどる。</p> <p>19時-21時：全員で近くのレストランで夕食。</p>	<p>同上</p> <p>(昼食) 市内のレストラン</p> <p>(夕食) 大学近くのレストラン</p>

4	9月11日 (日)、晴れ	<p>7時朝食（ホテル）。</p> <p>8時から市内自由行動（グループ行動）。市バス・地下鉄利用。それぞれ前日に決めた班別に市内に散って行く。</p> <p>17時全員無事ホテルにもどる。それぞれ興味深い出来事があったとのこと。これを体験して、それぞれ一段と自信を持ちまた逞しくなった印象を与える。</p> <p>18時－19時30分：北京師範大学の特別食堂で、歴史学院院長楊共楽先生の接待による夕食会。寧欣先生、張榮芳先生(魏晉南北朝)、趙信先生(唐代史)も同席。学生は北京ダックに満喫する。</p> <p>散会后、夜の学内を散策。翌日が中秋節で休日のため学内はのんびりした雰囲気漂う。</p>	<p>同上</p> <p>(昼食) 各自自由に食事</p> <p>(夕食) 北京師範大学の特別食堂（大学主催）</p>
5	9月12日 (月)、曇り	<p>7時朝食（ホテル）。</p> <p>8時30分：バスに荷物をすべて積み出発。</p> <p>9時－10時30分：海淀図書城付近の中関村図書大厦（新華書店）で、それぞれの必要図書を購入。</p> <p>11時－13時30分：北京大学。構内の図書館や歴史系教室（二院）、未名湖や清塔を見たのち、中国古代史研究中心を訪問。主任の榮新江教授の迎えをうけ、所内の諸施設（図書室や研究室）を見学。榮教授は中国のみならず世界的にも著名教授。このあと構内の北京大学の特別食堂で、榮教授の接待で昼食。ここでも北京ダックもあって学生は北京最後の食事を楽しむ。</p> <p>14時30分：バスで空港に到着、手続きを終えて構内に。</p> <p>17時30分：定刻どおり北京を離陸（CA183）。</p> <p>22時：羽田到着。荷物を受け取りその場で解散式。お互いこれを刺激として後期から全力で勉学に励むことを約束する。全員事故もなく無事で帰国することができた。</p>	<p>(昼食) 北京大学食堂（榮新江教授招待）</p> <p>(夕食) 機内食</p>



万里の長城(八達嶺)にて、誰もへばることなく元気に登りました。9月9日朝



北京師範大学歴史学院での学生交流、大変楽しく盛り上がりました。皆友達になりました。9月9日夜

海外ゼミ参加者の感想文

北京での体験

大橋 美津穂 (2年生)

私が今回の合宿で最も印象に残ったことは北京師範大学の学生との交流会です。今年は中国語を頑張ろうと思い、夏季休業中も今回の合宿直前まで中国語会話夏期集中講座を受講していました。集中講座の中で発音や文法などを学び、中国合宿ではたくさん中国語を話そうとはりきって参加しましたが、実際には私の中国語はまだまだで、北京師範大学の学生との交流もなかなかスムーズにはいきませんでした。

私たち明治大学の学生2~3人と師範大学の学生2~4人でグループになり、中国語と英語、それから筆談で交流しました。師範大学の学生たちはみな英語が堪能で、自分のつたない英語にとっても恥ずかしさを感じました。交流会は大変でしたが、互いに意思疎通ができた時は本当に感激しました。この経験を心に留め、これからは真剣に外国語の勉強に励みたいと思います。

中国体感!!

藤森 茜 (1年生)

「北京ダッグが食べたい！」そんな単純な目的で私は今回の海外ゼミナールへの参加を決めました。

初めて訪れた中国、日本とは全く違うマナーに驚いたり、壮大な万里の長城に感慨に浸ったりと、広大な国のほんの一部かもしれないけれど、中国という国を実際に肌で感じることができました。特に印象に残っていることは北京師範大学の学生たちとの交流会です。良い交流ができるかすごく心配でした。案の定会話は思うようにできず、自分の語学力の乏しさを実感し、外国語を勉強することの重要性を改めて知りました。しかし北京の学生が非常に日本に関心があるということが感じられ、大変うれしく思いました。

とても単純な目的で参加を決めた海外ゼミでしたが、想像以上に貴重な体験をすることができたと思っています。お目当てだった北京ダッグもお腹一杯食べることができ、お腹も心も大満足の海外ゼミでした！

四泊五日の交流体験を受けて

坂本 大輔 (3年生)

この度、北京に四泊五日間滞在して、中国の文化を実際に触れることができたという貴重な体験をすることができました。

万里の長城を登った時は、その急な造りと随所に見えるのろし台の跡が、ここが防衛要塞であったということを改めて認識させ、すり減っている石段が時代の重みというものを感じさせました。その一方で、市内中心の王府井や西単などの大手ショッピング場での盛況さと活気に、経済大国として発展し続けている中国の凄さがわかりました。

こうした発展が行われると、古い物は取り壊されていくものですが、中国では北京大学の校舎や胡同に見えるように、古い建物をそのまま残しつつ調和のとれた保存を行っていたと思いました。

北京師範大学の学生との交流会では、日中の文化の垣根を超えて親密な交流が出来ました。日中間にはまだ厳しい関係が続いておりましたが、こうした所からお互いを理解しあえればいいなと思いました。

東郊市場でのお茶の買い物について——第4日の自由行動から

波多野 雄大 (3年生)

自由行動日、私たちのグループは、東郊市場を訪れました。東郊市場は有名観光地とは違い、庶民的、現地的な、北京を味わうことが出来る空間と成っています。当然、英語すら通じませんが、値段は、格安です。いよいよ目当てのお茶屋につき、ノートと辞書を駆使してお茶を選別し、値切り、格安で購入することが出来ました。

このように、中国の一般的な市場で、買い物をすることを身を以て経験したことで、大概次第で何でも出来る。という、自信をつけられたとともに、日本での日常生活では、想像だにしない貴重な経験を出来たこの研修旅行に感謝いたしております。この旅行を計画してくださった氣賀澤先生、明大サポートの方々、陳先生を含む北京師範大学の方々、北京大学の方々に、心より御礼申し上げます。

海外ゼミの感想

加藤 視也 (3年生)

今回、海外ゼミで中国の北京へ行った。北京では、万里の長城、故宮、明の十三陵など多くの場所を訪問した。写真などで見たことのある場所だったが、実際に訪れてみてイメージが変わり、規模の大きさに驚かされた。

バスでの移動の時や、自由研修の間に北京の街を見て回ることもできた。北京の街はとても都会で、大きなビルが多くあり、交通なども発達していた。街の様子は実際に訪れないと感じにくいものだが、今回経験できてよかった。

また、2日目の夜には北京師範大学の学生達との交流も行った。言葉がうまく伝わらず大変だった。語学はとても重要だと感じ、今後しっかりと勉強しないといけないと感じた。非常に良い刺激を受けることができた。

人生の肥やし～リアルな中国～

栗田 緑 (4年生)

歩いてもどこまでも続く長城、広大な敷地に荘厳さを称えそびえる故宮。全てにおいてスケールが大きく、今では計り知れない皇帝権力の絶大さを感じた。

また、この五日間では中国人の意識の高さや熱心さ、先生や目上の方を敬う態度など、見習うべきものが多々あると思った。しかし、彼らは大震災を経ながら辛抱強く誠実に生きる日本人を尊敬すると言ってくれた。日本にいただけでは気付かない日本の良さを改めて知ることが出来た。

最後に、日中関係の懸け橋として、これからの私たちに期待している方にもたくさん出会った。今回の体験を心に留め、残り少ない学生生活は語学の習得に励み、世界を舞台に活躍する糧にしたい。

百聞は一見に如かず

石野 賢 (3年生)

私はこれまで日本から出たことがなかったので、今回が初の海外経験となりました。

実際に中国に来てみて何よりも驚いたことはその広大さでした。どこに行ってもとにかく広く、建物のスケールも日本のそれの比ではなく、圧倒されてばかりいました。例えば万里の長城や紫禁城は、中国についてそれほど詳しくなくても、一目見てそれとわかるくらいみんなよく知っている建造物です。しかしよく知っているはずのその場所に実際に来てみると、私の想像していたものをはるかに超えた存在感がありました。小さい頃から中

国史が好きで、アジア史専攻に入り3年間学んでいたにも関わらず、私は実際の中国の世界を実はほとんどわかっていなかったのではないかとさえ思いました。

歴史学を学ぶ上で、その文化を生んだまさにその現場を体験することの重要性を切実に感じる事ができて、大変意義のある経験をしたと思います。

北京のコンビニで買ったドライマンゴーは、黒かった

佐藤 礼 (3年生)

同好の士と共に北京で過ごしたこの5日間を振り返ってみると、自分にとって大変有意義なものとして過ごす事が出来たと思っています。出発前に自分が抱いていた中国に対する印象の数多くが覆されたこの旅は、非常に得難いものでありました。

中国に到着した直後にまず抱いたのは、騒がしい国であるという印象でした。路上では自動車のクラクションや自転車のベルが鳴り響き、地下鉄内では談笑する人々から携帯電話で通話をする人まで見られ、人々の立ち振る舞いの違いに異国を感じさせられました。

到着翌日からは教授の引率の元、日本には決して見る事の出来ない数々の史跡を巡り、そのスケールの大きさと開放的な雰囲気によって圧倒されました。万里の長城、紫禁城、万暦帝陵墓といった巨大な史跡が国家規模で保護され、それを現代に生きる我々がこうして見学出来るという事実には、感動を覚えずにはいられません。同様の姿勢は中国国家博物館にも現れており、無料で参観出来る博物館とは思えない程の規模にただ驚かされました。

一方で、私が天安門広場を観光していた際、大変衝撃的な光景を目撃しました。カートでペットボトル飲料水を売り歩きしていた老人を、中国公安警察の車が呼び止め、車から降りてきた警察が、売っていた水を奪い地面に叩きつけたのです。散らばった水は素手で叩き潰され、カートに残った水も車内に持ち去られ、老人は公安警察から叱責を受けていました。恐らく、禁止されている区域での販売行為が問題とされたのですが、有無を言わさぬ商品の破壊、それも威嚇の為としか思えない乱暴な対応、さらには観光客も多い天安門広場の駅前で行われた事実は、かなりショッキングなものでした。

北京市内には物乞いも多く見られ、5日間の滞在ではまだまだ中国という国家の本質を理解する事は出来ないと、切に感じました。今後も語学に精進し、いずれ必ず、再び中国を訪れたいと考えています。

「現地化」してみても気付いたこと

境 純 (1年生)

北京は、面白い街だった。万里の長城や故宮などの歴史的建造物もあるし、近年の急速な経済発展を象徴するような店も多くある。古い中国と新しい中国を一度に感じる事が出来た。

しかし、日本や欧米の色に決して染まることのない、「中国らしさ」は健在だった。横断歩道では車が歩行者の間をすり抜けていく。レジ打ちの店員は無愛想で、商品を投げるように渡す。客は列に割り込んでくる。このような行為は日本では考えられないことであり、非常識であるにとらえられるだろう。しかし、「現地化」が今回の私たちのテーマであり、一旦現地化してしまえば、このようなことは全く気にならなくなった。むしろ、日本では細かいルールにとらわれすぎていたり、他人に期待をしすぎていたということに気がついた。

異国に行って、「非常識」なことに直面したとき、それを受け入れるかどうかで、理解の幅が変わっていくのだということを実感した。

感動と発見の5日間

佐藤 友里佳（1年生）

今回氣賀澤先生引率の合宿に参加して、今まで本当の意味での歴史研究の面白さに気付いていなかったということが自覚できたとともに、これからさらに歴史研究に身を投じていこうと思いを強くした。

合宿で見学した多くの名所の中でも、私が特に感動したのが故宮紫禁城と頤和園である。高校の時から清朝に興味があり、楽しみにしていたということもあったが、実際に自分の目で見て、教科書の中の存在であった歴史が実感を持って迫ってきたからだ。また、北京師範大学の大学生との交流は、語学の必要性をすごく感じた刺激的なものであった。

大学に入って、好きであったはずの歴史の勉強になかなか積極的になれない自分に苛立ちを感じることも多かったが、この経験で素直に勉強したいという気持ちが生まれた。

この合宿で中国への関心が一層高まったが、それだけでなく同じアジア史を勉強する他学年の方とも親睦を深めることができ、とても楽しい充実した5日間であった。

現在に遺された過去の中国

吉田 亜有美（4年生）

私が今回北京を訪れるにあたって目的としていたのは、長城と紫禁城でした。実際に行って特に印象に残ったのも、この二つです。

長城へは、二日目に行きました。前日夜の雨も上がり、空は非常に澄み渡っており、遠くまで見渡すことのできる絶好の日和でした。長城に登り、第一に感じたことは、果てのなさです。山の峰峰に沿ってどこまでも防壁が続く景色には、圧倒されました。悠然と広がる大地からやってくる異民族を恐れて、長い時間をかけて防壁を築き上げた。その営みは、本当にすごいものだと思います。写真や言葉で伝わるものではありません。実際に見たからこそ、私はその果てしなさを分かったのだと思います。

翌日紫禁城を訪れたときは、残念ながら雨が降っており、九月なのに非常に寒かったです。日本との差を強く感じました。紫禁城は、中央をまっすぐに、午門から神武門までを歩きました。紫禁城の魅力はなんといっても、建物です。この場所に遺されているものは、明、清王朝が築いた中国の文化。でこぼこになったレンガの上を歩きながら、一体どれほどの人がここを通ったのだろう、と考えていました。

今回北京を訪れて、私が特に感じたことは、何もかもが大きいのだということです。長城と紫禁城は、それを最も体現していました。その大きさは、日本には分からなかったことです。中国歴代王朝は莫大な領土を持ち、それを統治していたのです。

私が知ったのは、中国のほんの一部、北京のたった一部分にしかすぎません。中国には、もっと多くの一面があるでしょう。かつて、その場所で生きた中国人たちは、一体何を考えていたのか。それを深く考えることができたと思っています。

観光ではないということ

高野 愛（3年生）

北京は古くは燕とか幽州とか言われており、北方との交通の要衝である、ということ私達は学生として学んでいます。これはあくまで講義を受けたり、本を読むなどして得た知識です。

そして北京へ行き、本物の、実物の万里の長城を見学します。そうすると、山脈の間に伸びる道や、山間に開けた平地が見えます。知識が無ければただ眺めの良い場所としか映らないでしょう。知識があれば、この道にどのような人、物が通って行ったか、北方異民

族とどのように関わっていたかが分かります。その知識があつて初めて万里の長城がどのようなものであるのかが見えてくるのです。少なくとも私はそのように感じました。

そしてこのような、知識と経験が合致するという貴重な体験をするチャンスはこの合宿の中でいくらでもありました。故宮、明十三陵、胡同、国家博物館……。また、現代中国に直に触れる機会でもありました。今までに私は上海、蘇州、杭州、西安、香港へ行ったことがあります。いくつもの都市の相違点を肌で感じるという面白い経験が出来たと思います。

日本にいるという甘え

富永佳純（1年生）

北京師範大学での交流会が私にとって最も刺激的な体験でした。痛感したのは、わからなくても伝えようとする勇気と気合いの足りなさでした。仲間といるときは強気でいたけれども、いざひとりになると急に何も話せなくなってしまいました。中国語では幼稚園生がするような質問や受け答えもままなりません。英語でも、単語ごとに区切って言ってもらわないと聞き取れず、また自分から話すときは文法にも発音にも自信がなかったので一言答えるのがやっとでした。私が困り切った顔をしていると、筆談をしたり、精一杯の日本語で話してくれたりしました。

3つの言語を用いてのコミュニケーション、また日本人であることがマイノリティーという状況は生まれて初めてで、今まで味わったことのない不思議な感覚でした。伝えたいことをどう表現しようかと考えるのはとても面白く、もっと時間がほしかったです。交流会では自分のいたらなさにかかなり落ち込みもしましたが、その気持ちを忘れずにこれからは語学に真剣に取り組もうと思います。



紫禁城(故宮)にて、後方は外朝の中心、皇帝が公式儀式を行った太和殿。今日は北京は小雨模様でした。9月10日昼



北京大学古代史研究中心の前にて。主任の榮新江教授と。教授からは昼食の招待を受けました。9月12日昼